

河原口坊中遺跡

海老名市河原口151他



高坏



又鍬



斧台



古い川跡の調査状況



木製品出土状況

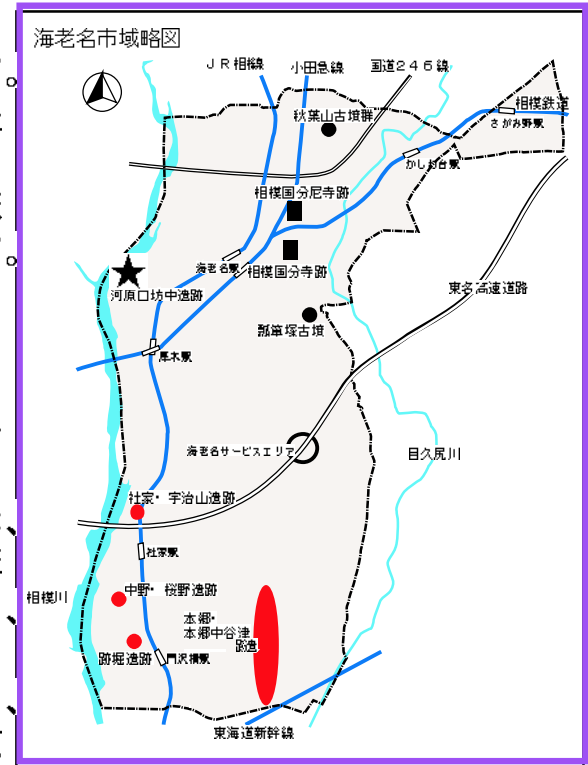


鍬

河原口坊中遺跡は、JR相模線・小田急小田原線厚木駅の北西約1kmのところに位置しています。地形的には相模川東岸の標高21～22mの自然堤防上に立地しています。この地域は、市の名前にもなっている「海老名氏」が平安時代後期から鎌倉・室町時代にかけて活躍した地域でもあります。財団法人かながわ考古学財団では、さがみ縦貫道路建設のために平成18年6月から継続的に発掘調査を行っています。

これまでの調査で、鎌倉時代から江戸時代の井戸や溝、掘立柱建物跡、柵列、奈良・平安時代の竪穴住居跡や溝、古墳時代では古墳の石室や周溝、弥生時代では竪穴住居跡や方形周溝墓などの遺構が確認されています。遺物も土器や石器、石製品、土製品、金属製品などが出土しています。

特に弥生時代の遺物がたくさん見つかり、在地の土器の他に東京湾岸地方や東海地方の特徴のある壺などが出土しています。このような状況から相模川を利用した地域間交流があったことが考えられます。また、相模川河川改修事業地区では神奈川県内で3例目となる小銅鐸も見つかりました。



今回の成果

今回の調査では、弥生時代中期頃（約2000年前）のものと思われる古い川跡が、地表面から4～5m位の深さから発見されました。川跡からは土器のほかに鍬・鋤などの木製農具をはじめ、火おこしの道具である火鑽臼、高坏・杭・板材などたくさんの木製品が見つかりました。そのほかに猪や鹿の骨や歯、鹿角、玉虫などの昆虫の羽、クルミなども見つかりました。本来、木や種子、骨などの有機質は地中にあると分解されて大変残りにくいものです。今回見つかった木製品は、川跡の土が水分の多い粘質土であった為に、腐ることなく残っていたと考えられます。木製農具は当時の生活を知ることができるたいへん貴重な資料です。

【用語の解説】

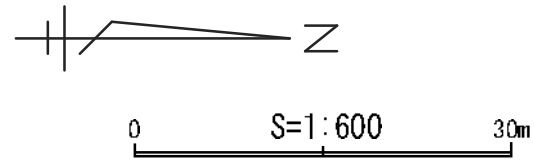
- 遺構：遺跡で見つかる住居跡や溝・井戸など、人が構築した施設の跡。
- 遺物：遺跡から出土した土器や石器など、その時代の人が使用していた道具類。
- 竪穴住居：地面を掘り込んで、下を平らにならして床を作り、その上に屋根をかけた住居。
- 土坑：地面に掘られたやや大きめの穴。
- 古墳：3世紀末～7世紀代にかけて造られた高い盛り土をもつ有力者のお墓。丘陵を利用して造られることもある。
- 石室：古墳の内部施設で石材を積み上げて造る。
- 周溝：墓域を区画するために掘られた溝で、墳墓の周囲を巡る。
- 高坏：お皿やお椀に脚がついたもの。食べ物やお供え物を盛りつける器。
- 火鑽臼：発火具の台木のこと。木製の台の上に堅い棒を押しつけて回転させて摩擦熱によって火をおこす。手でもむ方法と、火鑽弓を用いる舞鑽法がある。
- 斧台：磨製石斧を固定し、柄に取り付けるための部品。
- 磨製石斧：研磨して刃を作り出した石斧。
- 石帯：奈良・平安時代に身分の高い人が身につけた革帯・腰帯の石製の飾り具。
- ガラス玉：弥生時代から古墳時代に作られた首飾りの一部。一般的に古墳や横穴墓から副葬品の一つとして出土する。
- 小銅鐸：弥生時代中期から古墳時代前期にかけて作られた銅鐸に似た小型青銅製品で、鑄造で作られる。祭器の一種と考えられ、全国で50例ほどが知られている。

出土した火鑽臼とその使用方法



河原口坊中遺跡

調査地区配置図



小銅鐔出土状況



住居址土器出土状況



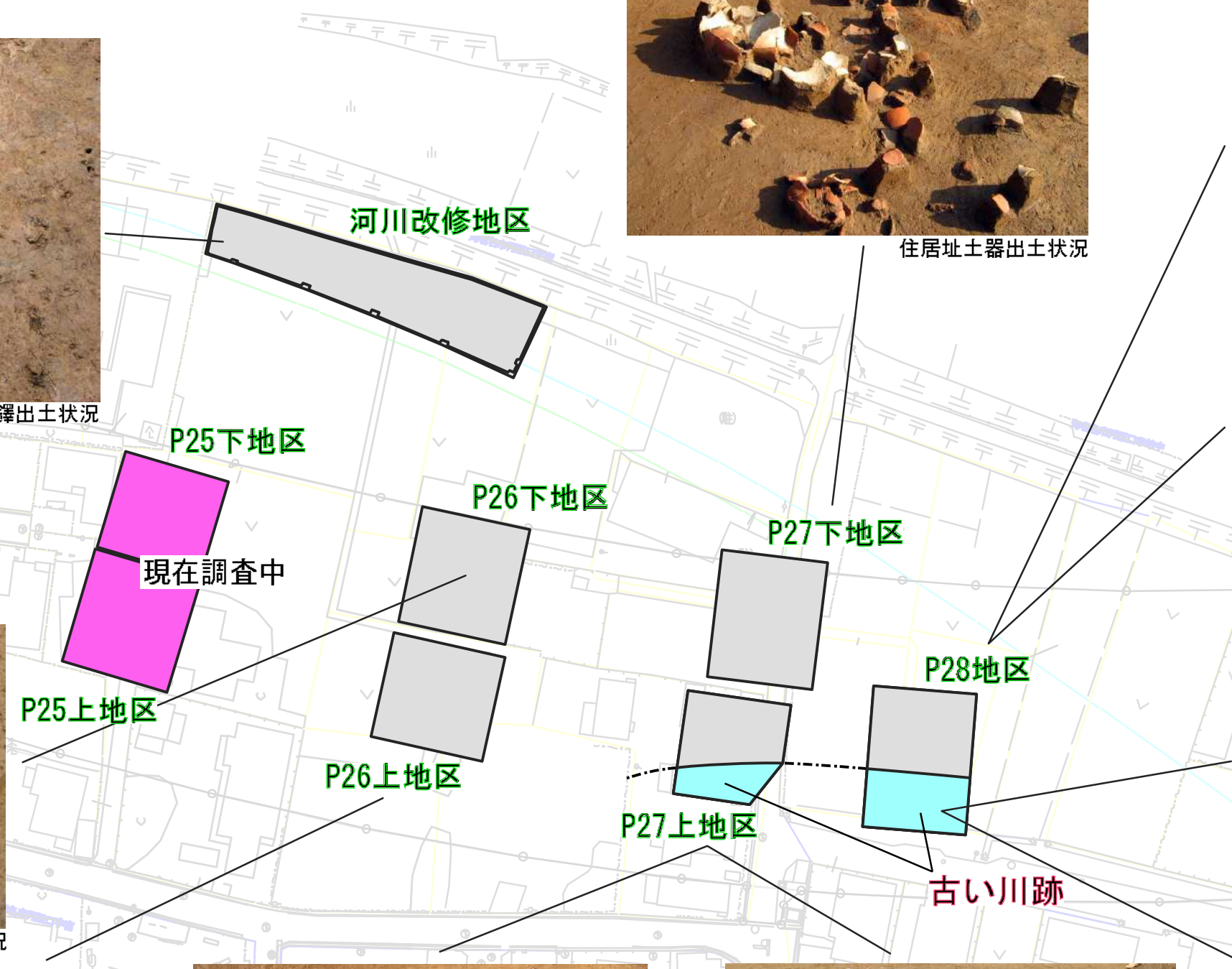
土器の集中出土状況



土器の集中出土状況



土器（壺）の出土状況



川跡から出土した木製品



周溝墓からの土器出土状況



土器の集中出土状況



土器（台付甕）の出土状況



川跡から出土した木製の高坏